
桜矢茂は逆境に弱い

脳好き人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜矢茂は逆境に弱い

【Nコード】

N0313Y

【作者名】

脳好き人間

【あらすじ】

超優秀で性格も優しい男、桜矢^{さくらや}茂^{しげも}は逆境に弱い。そんな茂がある日、一人の家出少女と出会う。

一話ごとに視点が切り替わります。大体毎週土曜日更新です。

第一話

「今日もこんな時間まで残業か。きついな。でも、明日は土曜だし、やつとゆつくり出来るよ」

僕は、十二時を指した腕時計の針を見ながら呟いた。毎日こんな時間まで働いて、何のために自分は生きているのか、最近よく疑問に思う。上司から昇進の話を聞かされた時は飛び上がる程嬉しかったけど、実際に昇進してみると、思っていたより給料は上がらなかったし、前とは比較にならない程忙しくなった。

「こんな暗いこと考えてても意味は無いな。とつと帰ろう」

愛用の自転車に乗り、鼻歌を歌いながら帰る。どんなにつらい時でも、これで気分が回復してしまう僕は、かなりの幸せ者なんだろう。それにしても会社が家の近くで助かったな。これが無ければ僕の心はとつくの昔に折れていただろう。

僕の家であるボロアパートに着くと、自転車置場に変な人物がいた。中学生くらいに見える女の人が、自転車置場の隅で座り込んでいる。どうしよう。話しかけるべきだろうか？

「どうして、こちらを見ているのですか？」

僕が迷っていると、向こうから話しかけられてしまった。これで逃げ道は無くなってしまったな。

「いや、こんな所に座ってるなんて、変だなんて思って。君はどうしてこんな時間にこんな場所にいるんだい？」

腕時計を見ると、今は十二時半頃だった。こんな時間に女の子が外を出歩いていて、不審者に会ったら大変だ。この子がここにいる理由が下らないものだったら、勇気をだして説教しよう。

「実は、家出、してしまって、寝る場所を探していたら、その、丁度いい場所を見つけたので」

「君は馬鹿なのか！こんな所にいて、危険な人に会ったらどうするんだ。とにかく、早く家に帰りなさいっ！」

「ひっ、そ、その、すみません。でも、家には、帰れま、せん」

おっと、この子を怯えさせてしまったようだ。反省しないと。でも、こんな真面目そうな子が家出するなんて、何か事情があるんだろうな。一晩くらいなら泊めてあげてもいいかな？

「いきなり大きな声出してごめんね。お詫びと言っては何だけど、一晩くらいなら僕の部屋を使ってもいいよ。僕は近所のホテルに泊まるから」

最近仕事ばかりで給料が余ってるし、一晩くらいホテルに泊まってもいいだろう。この子がこんな場所で一晩過ごすよりは、よっぽどマシだ。

「えっ。で、でも、いいんですか？」

「全然良いよ。それで、どうするんだい？」

「お、お願いします」

よし、なら取り合えず僕の部屋に連れて行かないと。僕も着替えとかを準備しないといけないし。

「じゃあ、ついて来て」

二百二号室が僕の部屋だ。ちなみに、百号室から百二号室が一階で、二百一号室から二百三号室までが二階だ。要するにこのアパートには合計六部屋しかない。部屋の番号は管理人さんの趣味だ。最初に管理人さんから部屋の番号を言い渡された時は驚いたな。

部屋に入ると、着替えと歯ブラシを鞆の中に入れた。でも、ホテルって歯ブラシが用意されているとか聞いたな。よくよく考えると僕はホテルに泊まったことがない。そうだ、あの子に聞いてみよう。

「ねえ、ホテルって、歯ブラシ……あれ、いない」

部屋を見回してみると、あの子がいなかった。何故だ。そういえばあの子を最後に見たのは玄関だった。あ、警戒されてるのかな？ 玄関に戻ってみると、あの女の子は廊下に座り込んでいた。

「君、もしかして僕を警戒しているのかい。いやだなあ。僕は世界で三本の指に入るほどの安全男だよ。最近流行りの草食系男子ってやつ。いや、それよりもっと上、光合成系男子だ。僕は草すら食べない」

ふう、これで説得出来たかな。上司いわく、僕は時々変なことを口走るらしいから、多少心配だな。

「警戒、してないです。でも、私なんかが部屋に入って、いいんですか？」

この様子だと、まだ警戒が解けてないようだ。もっと明るく話しかけないと。

「部屋に入っているのかって？いいに決まってるじゃないか。むしろ入ってください。どうぞどうぞどうぞ」

言いながら、女の子を部屋に引っ張っていく。力が弱く、簡単に部屋に引きずり込めた。って、この状況、端から見たら僕が女の子を部屋に無理矢理連れて行ってるように見えるかも。いや、深く考えないようにしよう。

「僕は君に部屋を貸すわけだけど、一つだけ条件がある。僕は今日ホテルに泊まらないといけないからね」

「じ、条件とは、何なんですか？」

「ただ、質問に答えてくれればいいんだ」

「し、質問、ですか？」

「そう。あのね、ホテルって、歯ブラシが用意されてるんだっけ？」

「は、歯ブラシ？」

この人は何を言っているんだ、とても言いたそうな顔で見られた。うう、もしかして、変なことを聞いてしまったのか？

「歯ブラシって、何ですか？」

「……………え？」

この子は、一体何を言っているんだ。あれ、僕は働き過ぎで耳がおかしくなったのか。

いや、待てよ。さっきこの子を部屋に引きずり込んだとき、異常に軽かった。真面目そうなのに家出。臆病な性格。歯ブラシを知らない。ひよつとして、この子は、親から虐待を受けていた？

「君、もしかして、親から虐待を？」

「えっ、……はい、そうです」

当たり、か。最近よくテレビで子供を虐待する親が取り上げられているけど、実物を見るのは初めてだ。どうしよう。家に帰すべきではない、な。と、とりとえず、しばらくはこの子に此処を譲って、近所のホテルに泊まるか。

「き、君。僕は近所のホテルに泊まるから、しばらくここは自由に使っていていいよ。冷蔵庫の中の食材も、自由に使っていていいからねっ！」

「え、ちょ、ちょっと待ってください！」

制止の声を振り切って、着替えを入れた鞆を手にとり、走って逃げた。どうしよう。まさかこんな本格的な問題に遭遇するなんて。と、とにかく、ホテルだ。一晩寝て、それから考えよう。幸いホテルは家のすぐ近くだ。助かるぜ。

ホテルに入ると、絶望的な光景が視界に映った。寝る場所が、なんか近未来的だ。どういふことなのか他の客に聞いてみると、どうやら此処はカプセルホテルというところらしい。カプセルホテル、とは、法律上ホテルではなく、簡易宿泊場、だっけ。これは大変だ。僕は、閉所恐怖症なのだ。

いや、待てよ。突然走り出す。いきなりカプセルホテルの豆知識を思い出す。もしかして、僕は、動揺しているのか？

「あの、すみません。僕、動揺してます？」

さっき話した人に、尋ねた。

「はあ、そんな質問をする時点で、平常心じゃないのは確実だと思いますよ」

「……………なるほど」

そうか、僕は動揺しているんだ。果たして、この状態で閉所恐怖症の僕が、この狭い場所で寝ようとすれば、どうなるのだろう。

まあ、やれば分かるか。

第二話

「うーん。どうしよう?」

優しい男の人に部屋を貸してもらえたけど、あの男の人はいきなり走って行っちゃったし、どうすればいいんだろう?

冷蔵庫の中身、使ってもいいって言われたけど、料理の仕方なんて分からないし、寝るとしても、勝手に布団を使ったら怒られるかもしれない。

そういえば、どうして私が親に虐待されてるって分かったのかな? 私なんて、テレビで虐待についての番組を見るまで、虐待されること、分からなかったのに。次に会ったら、聞いてみよう。

「た、ただいま」

……もう帰ってきた。しかも泣きながら。あの男の人に、何があったんだろう?

「お、おかえりなさい。あ、あの、なにが、あったんですか?」

「な、何も無かったとも。もし、何かあったとすれば、君の方じゃないかい? 例えば、料理の仕方が分からない、とか」

すごい。そんなことまで分かるんだ。でも、それでどうして涙を流すの?

「そうなんです。料理、分からなくて」

「当たっちゃったよ。いや、やっぱり当たりだったよ。今日はもう

遅いから、僕が作るよ。料理は明日教えよう」

「ありがとうございます。でも、明日教えるって？」

もしかして、明日もここに居ていいってことなのかな。いや、それは流石に都合が良すぎるかな。

「うーん、そうだった。君、家には帰りたくなくて、行く当ても無いんだろ？」

「はい」

「君さえ良ければ、此処にしばらく泊まっていきなよ。僕は困っている人には優しくする主義だからね」

「え、本当に、いいんですか？」

「もちろん。ただ、言いにくいんだけど……」

「言いにくい？」

言いにくいって、なんなんだろう。お金を払えってことなのかな。それとも、体、とか。テレビでは、そんな感じのことやってたし、嫌だけど、仕方、無い、のかな？

「実はね、僕はホテルに泊まれない体質のようなんだ。だから、ここで生活するなら、僕と一緒に暮らさないといけない。……って、泣いてる。そんなに僕と一緒に暮らるのが嫌かい？」

「いえ、そんなわけではないです。ただ、そこまで優しくしてもらえて、

嬉しくて」

嘘ついちゃった。本当は、色々被害妄想してて悲しくなって泣いちゃってただけ。でも、本当のこと言ったら嫌われちゃうだろうし、仕方ないよね。ごめんなさい。

けど、嬉しいのは本当だな。見ず知らずの他人にここまで親切にしてくれる人に会えるなんて、家出してよかったな。

「嬉しい、かい。なら、いいんだけど。まあ、ちょっと待っててね、すぐ料理作るから」

「あ、はい。ありがとうございます」

料理つて、どんな感じなのかな。今までコンビニのお弁当しか食べたことなかったから、楽しみだな。

ああ、美味しそうなニオイがしてきた。そろそろ出来そうだ。

「はい、出来上がり。時間が無かったから多少雑だけど、ミートスパゲッティだよ」

美味しそうな料理を、持って来てくれた。大変だ。もう我慢できない。

「いただきますー!!」

「ちょっと、フォークをそんな風に持つんじゃない。いや、今日はいいや」

なんだか私のフォークの持ち方に不満があるようだけど、今はそれどころじゃない。こんなに美味しいものを食べるのは初めてだし、

よくよく考えれば二日ぶりの食事だ。

「ふう、ごちそうさまです」

気がつけば、もう食べ切ってしまった。あの男の人の方を見ると、まだ一口も食べてない。もしかして、そんなすごいスピードで食べちゃったのかな。

「そんなに美味しそうに食べられると、作った僕としては嬉しいね。でも君、まだお腹いっぱいじゃないんでしょ？」

「う、は、はい」

「なら、僕の分も君にあげよう。ただ、一つ条件がある」

「条件、ですか？」

「君の名前を覚えてくれないか。長い付き合いになりそうだし、名前を知らないと不便だ。ちなみに、僕の名前は桜矢茂。よろしく」

「私の、名前は梅坂^{うめさか} 由美^{ゆみ}です。よろしくお願いします」

自己紹介を終えると、私はミートスパゲッティを半分、自分の皿に移した。

「あれ、由美ちゃん。全部食べてもいいんだけど？」

「私も、桜矢さんの名前を覚えてもらいましたから」

そう言うと、桜矢さんは優しくそうに微笑んだ。この人はなんて温

かい人なんだろう。一緒にいると、幸せな気分になる。私も、桜矢さんのことを幸せな気分になせられるようになりたいな。

そうだ、料理をすればいいんだ。私が出来そうなことといえば、それくらいしか無いし。桜矢さんに教えてもらえたら、きつとすごい料理が作れるようになると思う。なんだか明日が楽しみだな。

第三話

目覚めると、いつもとは違う違和感がする。誰かが居るような。

あ、由美ちゃんか。寝る前、どっちが布団で寝てどっちがソファで寝るかで、布団を譲り合う言い争いになったんだった。結局、二人で布団を共有することになったんだけど。勘弁してほしい。僕だって一応男だし、ある程度警戒してほしい。今日、仕事から帰ったら色々説教しないとな。由美ちゃんは常識がなさすぎるところがあるからな、あれじゃあ将来が心配だ。

それにしても、まあ、由美ちゃんの寝顔は綺麗だな。寝顔フェチの僕にこんな寝顔をさらすなんて、危険にもほどがある。しかし、綺麗だな。ちよつと痩せすぎ感じがするけど、これからちゃんとした生活をしていれば、今よりもっと綺麗になるだろう。

おっと、いけないいけない。邪心は捨てよう。取り敢えず、こんなに気持ちよさそうに寝てる由美ちゃんを起こすのは悪いし、料理を作ったら、とっとと仕事に行こう。

「では、いつてきます」

音をたてないように小声で言い、玄関の扉もゆつくりとしめた。会社に着くと、改めて仕事の多さを実感して、嫌な気分になる。

でも、これからは由美ちゃん的生活費も稼がないといけないんだし、頑張ろう。

「桜矢君。今日も早いね。他の社員がみんな桜矢君みたいに仕事にやる気を出してくれれば、会社ももっと大きくなるんだろうね」

「社長こそ、僕より全然早くに会社に来てたじゃないですか。あと、社員みんなが社長くらいに優秀になれば、この会社は世界でトップ

になれますよ」

社長からのお世辞に、お世辞で返す。尤も、社長が優秀なのは本当で、この会社を建てる為のお金は全て自力で稼ぎ、社員が集まるまでは仕事を全て一人でこなしていたという、もはや超人レベルの優秀さなのだ。ちなみに僕がこの会社に入社した理由の一つに、社長を尊敬していたから、というのがある。

「いやいや、僕もう年だからね。もう昔のようにには出来ない。じきに若者達に越されるよ」

「僕はまだ若いですけど、これから先、社長ほどの立派な人になれる自信は無いですけどね」

「いや、君なら昔の僕以上の人間になれる。一つの欠点を克服すれば、だけど」

「もしかして、逆境に弱いこと、ですか？」

「なんだ、自分で分かっているじゃないか。なら、なんとか克服してくれ。……ここだけの話、もし君がその弱点を克服出来れば、次期社長は君にしようと考えているんだ」

次期、社長？

「はい。頑張つて克服しますっ！」

「うん、いい返事だ。それじゃあ、頑張ってくれたまえ」

迎えの人達が来ると、社長は去って行った。それにしても、次期

社長か。頑張らないとな。

仕事を片付けていき、ふと時計を見ると昼の二時になっていた。そろそろ帰るとしよう。

この会社では、土日は昼の二時半までに仕事を終えるという決まりがある。社長が考えた決まりで、この決まりができて以来、土日の出勤希望者が続出している。他の会社ではあまり見られない光景だろうな。

家に帰ると、由美ちゃんが料理本を黙々と読んでいた。

「ただいま。どうしたの、料理本なんて読んで？」

「あ、おかえりなさい。その、お昼ご飯、作ろうと思って」

しまった。朝ご飯は作ったのに、昼ご飯を作るのを忘れてた。僕としたことが、情けない。

「せっかくだから、今から僕が料理を教えるよ。でも、どうして料理なんてしようと思ったんだい？」

いざとなれば冷凍食品を解凍すればいいだけなのに。ま、まさか、電子レンジの使い方が分からない、わけじゃないよね？

「あの、私、桜矢さんの役にたちたくて。私が料理を担当すれば、少しは楽できますよね？」

「なるほど。確かに由美ちゃんが料理をしてくれれば、僕も助かるよ」

まあ、部屋を貸すんだから、料理くらいやってもらっても悪くないだろう。多分。

「とにかく、料理を教えるから、こっちにきてくれ」

「は、はい！」

由美ちゃんは、思ったとおり飲み込みが早く、教えたことをスポンジのように吸収してくれるから、教えるのはすごく簡単だった。ちなみに、電子レンジの使い方は知っていた。

料理は一時間程で完成した。味の方は、まあ、そこそこ、だった。そういえば、由美ちゃんにあのことについて話しておかないと。僕にとっては、いや、由美ちゃんにとって大切なことだからな。

「あのさ、由美ちゃん。話があるんだけど、いい？」

「話して、何ですか？」

「寝る、場所のことだけど……」

「ああ、私にソファで寝ろってことですね。いやだなあ、私だつて見ず知らずの他人に布団を使わせるのが嫌なくらい分かりますよ」

相変わらずこの子は被害妄想が激しいな。とにかく、誤解を解かないと。

「違うんだ。実は僕、ソファで寝るのが生き甲斐でね、昨日は疲れてたからうつかり布団で寝ちゃったけど、本当はソファで寝たかったんだ。あとね、僕は自分以外の人が自分の布団で寝ていると、異常に興奮するという性癖があつてね、君には、どうしても布団で寝てほしいんだ」

ふう、説得、出来た、か？

由美ちゃんの方を見ると、ばかんとしていたが、しばらくすると口を開いた。

「あ、あの、分かりました。昨日は、布団で寝るように言っちゃって、ごめんなさい。今日は、私だけで布団で寝ます。どうぞソファーでおくつろぎください。本当に、すみませんでした」

心なしか、僕を見る目に怯えが混ざっているような気がするけど。気のせいだろう。それよりも、だ。

「あのさ、由美ちゃん。一つ怒らないといけないことがあるんだけど、いい？」

由美ちゃんは、一瞬びくつとしたが、そのあと、ゆっくりとうなずいた。

「さっき由美ちゃんが言ってた言葉で、僕が怒ったところがあるんだけど、分かるかい？」

「……すみません、分かりません」

「あのね、君は見ず知らずの他人を、とか言ってたよね。そういうこと、もう言わないでほしいんだ」

「え、どういうことですか？」

「僕達は、互いに自己紹介をしてるし、料理も一緒に食べた。それに、同じ部屋で暮らしてるんだ。そんなこと言われると、悲しいよ」

さつきは誤解を解くのに精一杯で気がつかなかったけど、よくよく考えれば酷い言葉だ。もしかして、由美ちゃんは僕のことを嫌いなのだろうか？

「悲しい、ですか。なるほど。じゃあ、私達の関係って、どういう関係なんですか？」

「え、それは、その……」

そう言われると困るな。家出少女と家主、だとなんかいがわしいイメージがあるし、同居人、とかかな？

「うーん、そうだ。桜矢さん、わかりました。恋人ですっ！」

「は、え、な、何だって？」

「テレビで、見ました。一緒の家で暮らす、家族とは違う人のことを、恋人っていうんですよね？」

はあ、びっくりしたな。そういえばこの子の情報源のほとんどはテレビだったな。確か家出のきっかけもテレビだったし。

とにかく、誤解を解くぞ。

「いやいや、恋人ってのはね、互いに愛し合っている人達のことをいうんだ。僕達はまだ、愛し合ってるわけじゃないよな。だから、僕達の関係は、友達、いや親友ってところかな。ザ、ベストフレンドだよ」

まだって、なんだよ。まあ、深くは考えまい。

由美ちゃんの方を見ると、どうやら混乱しているようだ。いけな

いな、緊張すると無駄に早口になる癖、直さないとな。

「ようするに、僕達の関係は、親友ってやつだよ。多分ね」

「は、はあ。分かりました」

「分かってもらえてなによりだよ」

よし、これで一件落着いてやつかな。でも、親友とは言ったものの親友ってなんだろう。正直、僕には知人はそこそこいるが、親友はいないのだ。まあ、なるようになるかな。

「……質問があるんですけど」

今度は向こうから質問か。まあ、いいだろう。

「なんだい、言ってみなよ。僕に答えられることなら、何でも答えるよ」

「愛って、なんですか？」

げ、なんでそんな質問を？……あ、さっきの僕の言葉か。

「そ、それは、まあ、お互いのことを大切に思ってること、とか？」

愛ってなんですか、だと？僕が知ってるわけないよ。というか、普通は知っているものなのか？僕だけが知らないのか？というか、知っている人なんかいるのか？

第四話

今日は、桜矢さんは仕事が休みらしい。昨日は私が起きたとき、既に仕事に行つてたけど、今日はまだ寝ているみたいだ。

昨日のお返しに、朝ご飯を作つておこうかな。せつかく料理の仕方を教えてもらえたんだし。

えっと、取り敢えずハムエッグあたりにしよう。たしか、昨日料理を教えてもらつてるとき、卵が好きだ、とか言つてたような気がするし、時間をかけずに作れそう。キッチンのすぐ近くにあるソファで寝てる桜矢さんを起こさないためにも、静かに素早く作らないとな。

そういえば、桜矢さん、ソファで寝るのが生き甲斐とか、人が自分の布団で寝てると興奮するとか言つてたけど、本当なのかな？だとすると、少し怖いな。私が寝ているとき、興奮してたりして。うわっ、鳥肌がたつてきた。

「う、うーん。朝、か」

私が料理をテーブルの上に載せているとき、桜矢さんが目を覚ました。残念だな、もうちょつと寝顔を見ていたかったのに。私、人の寝顔を眺めるのが好きだから。

「おはようございます。桜矢さん」

「うん、おはよう。……あれ、朝ご飯作ってくれたの？」

「はい。……もしかして、迷惑でしたか？」

「いや、そんなことないよ。すごく嬉しい。ありがとう」

「いえ、感謝されるほどのことでもないですよ。桜矢さんへの恩と比べたら、こんなの、些細なことですよ」

「お、恩って……」

苦笑しながら、桜矢さんは朝ご飯を食べはじめた。味、大丈夫かな？ 味見した感じでは、大丈夫だったと思うけど。食べ終わると、桜矢さんはおもむろに口を開いた。……おもむろに。

「あのさあ、これ、ハムエッグ、だよな？」

「はい、そうですけど。もしかして、美味しくなかったですか？」

何か、問題があったのかな。そこまで酷い味じゃないと思ってたんだけど。

「いや、美味しくなかったわけじゃないよ。むしろ美味しかったけど……」

「けど？」

「ハムエッグじゃなかった。更に言うなら、ウィンナーエッグだった」

「ど、どういふことですか？」

「あのね……」

そのあと、私が使っていた食材が、ハムじゃなくてウインナーだったということを教えられた。あと、卵は殻を取り除くものだとも言われた。私も、朝ご飯を食べると口の中があちこち切れてたからおかしいなとは思ってたけど、まさか卵の殻がいけなかったなんて

「あの、変な食べ物作ってすみませんでした」

「いや、いいんだよ。むしろ、あの状態で美味しい料理に出来るってことは、凄いことだと思うよ」

「でも、口の中、切れちゃいましたよね。もしかして、私に気を使って全部食べてくれたんですか？」

桜矢さん、私に気を使ってくれるのは嬉しいけど、それで口を怪我しちゃうんなら、食べないで欲しかったな。役に立ちたくて作ったのに、これじゃあ逆効果だ。はあ、落ち込むなあ。

「いや、別に気を使ったわけじゃないよ。口を犠牲にしても食べたくなくなるくらい的美味しさだったから、むしろ貴重な体験ができてトロピカル、トロピカルハッピーだよ」

目を泳がせながら、フォローするような言葉を言われた。桜矢さん、私が傷つけないようにしようとしてくれてるのかな。嬉しいな。でも、トロピカルハッピーって……………

とにかく、次からは人を傷つけない料理を作ろう。

第五話

まさか、由美ちゃんにあんな才能があるとは、驚いた。ハムエツグを作るとき、ハムの代わりにウィンナーを使い、卵の殻を取り除かなかったというのにそこそこ美味しい料理を作ることが出来るなんて。まあ、口の中は悲惨なことになったけど。

でも、もし正しく料理する方法を身につければ、凄い美味しさになっただろう。いや待て、むしろこのまま、変な食材を使ってくれた方が面白いんじゃないか？流石に卵の殻入りはもう御免だけど、体にダメージを与えない範囲なら問題ないだろう。ウィンナーをハムの形に切ることが出来ていたんだ。もしかしたら野菜を牛肉の形に出来たりするかもしれない。いや、流石にそれはないだろうけど。

「あのだ、由美ちゃん」

「な、なんですか？」

「思ったんだけど、由美ちゃんは間違った食材を使っても美味しい料理が作れるんだから、別にわざわざ正しい食材を使わなくてもいいんじゃないかな？」

「……それって、暗に私なんかじゃ食材を覚えることなんて出来ないよって伝えようとしてるんですか？」

だから、なんでこの子はこんなにもマイナス思考なんだ。ひょっとして、僕の言い方が悪かったのか？

と、とにかく、なんとか説得しないと。

「いやいや、そんなことないよ。むしろ由美ちゃんは天才だ。IQで言うなら三百くらいはあるんじゃないかな。とにかく、君だってあの料理を食べただろう。そして、美味しかっただろう。君はね、まさしく天才なんだよ。これは並の人には真似出来ない、凄いことなんだ。だから頼むよ、是非これからも面白美味しい料理を作ってくれよ」

「……はい、わかりました。そういうことなら、これからも頑張ります」

ふう、なんとか誤解を解けたようだ。しかも無事に説得できてる。

「よし、なら、昼ご飯もお願いできるかな？ なんだかんだでそろそろ昼だし」

「任せてください。次は、怪我しない安全な食べ物を作りますね」

「ありがとう。よろしく頼むよ。でき、いや、なんでもない」

出来るなら、次は食べても痛くない料理を作ってね、とは、言わないでおこう。なんか傷つけそうな気がする。よくわからないけど。しかし、暇だな。何かを待つってことがこんなにきついなんて。一時間くらい経ったかと思って時計を見ると、なんと五分しか経ってなかった。そういえば僕は今まで生きていて、何もしていない時間というのがほとんどなかったな。確か、小学校の時に、年末に祖父母の家に泊まりに行ったとき以来だ。あの時は、一分がものすごく長く感じて、家に帰ったときはまるで長旅から帰ってきたかのようになんか懐かしく思えて、涙が出そうになったんだった。

「そろそろ出来ますよ。もうちょっとだけ待っていてください」

暇そうにごろごろしている僕に気を使ってくれたのか、由美ちゃんが言った。こういう小さな気遣いって、結構嬉しいな。

「じゃあ、いただきます」

由美ちゃんが作ってくれたうどんのような物を口に入れると、口いっぱい野菜の味が広がった。一瞬驚いたけど、とにかく美味しい。やっぱりこの子は僕が予想した通り、料理の天才だ。もし店を開けば、かなりの人気店になるだろう。

「ものすごく美味しいよ。しかも、栄養のバランスもとれているようだね」

「わかります？結構工夫したんですよ」

由美ちゃんが幸せそうな笑顔で、誇らしげに言う。この子の自信がありそうな態度、初めて見るな。自信を持つことは良いことだし、この調子で由美ちゃんには自信をつけていてほしい。

実際に自信を持つのに相応しい料理の味だし、タダで食べれるのは、申し訳ない気がする。

「ごちそうさま」

完食し、食器をさげようとすると、由美ちゃんに遮られた。

「後片付けも、私がやります」

「いや、それじゃあ由美ちゃんに悪いよ」

「いえ、どうせ私暇ですから。むしろやることがあった方が気が楽です」

「あ……………」

「どうしたんです？」

なんで僕は今まで気づかなかったんだ。さっき僕は、たった十分くらい何もせずに待ってるだけで辛かったじゃないか。

僕が仕事に行っている間、由美ちゃんはその何倍もの時間をこの部屋で過ごしているんだ。このソファとテレビ以外ほとんど何も無い部屋で。

なんてことだ。早く解決方法を考えないと。

おもちゃを買ってくるとか？…………いや、おもちゃで遊んで喜ぶような歳じゃないだろう。

ゲームを買って来ようか？…………いや、ゲームの知識が無い俺が買ってきて、変な物だったらどうするんだ。

DVDを借りて来ようか？…………いや、わが家のテレビはビデオすら見れないんだった。

ど、どうしよう？早くなんとかしないと……………

第六話

「由美ちゃんに、おこづかいをあげることにしよう」

桜矢さんが突然黙りこんで、しばらく待っているといきなりこんなことを言われた。おこづかいってなんだろう？

「おこづかい、ですか？」

「うん。やっぱ君くらいの歳になると、自分で好きな物を買いたいよね？」

「でも、悪いですよ」

「悪いって、なんで？」

「私、ここに泊めてもらってるのに、その上おこづかいをもらうなんて……」

おこづかいってというのがどんな物なのかはわからないけど、これ以上何かもらうのは悪いと思う。

桜矢さんの方を見ると、目線がキョロキョロしていた。もしかして、いつものアレが始まるのかな？

「さ、桜矢さん？」

「あ、あのね、さっきはおこづかいって言ったけど、取り消そう。おこづかいのようにあまっちょろいものじゃない。給料を払おう。君は美味しい料理を作ってくれるからね、その分の給料ということ

だ。君の料理は何億出しても食べたくなる程の美味しさだからね、給料は言い値で払うよ。さあ、いくらがいいかい？」

「いや、いくらって言われても……」

言い淀んでいると、更に桜矢さんの様子がおかしくなってきた。しまった。適当でもいいから何か言っておくべきだった。

「なんだい。お金じゃだめだったのかい。わかった。ダイヤか？ プラチナか？ おっと、最近金はブームだったね。時給金百グラム、とかなら満足かい？」

桜矢さんがいよいよ常軌を逸してきた。時給金百グラムなんて、払えるのかな。金の価値なんて知らないけど。

とりあえず、桜矢さんの暴走を止めるために、何か言わないと。

「わ、わかりました。おこづかいの金額、決めました」

「うん？ いくらにするんだ？」

よし、桜矢さんを落ち着けることに成功したぞ。で、でも、金額っていくらくらいにすればいいんだろう？

サラリーマンの人が死ぬまでに稼ぐお金が二億くらいらしいから、百で割って、二百万円。一年は確か四百日くらいだから、五千万、くらいかな。

「五千万、にしてください」

「五千万、か。それは時給、日給、週給、月給のどれだい？」

……週給ってなに？日給が一日で、月給が一ヶ月のお金だったことはわかるけど。

あっ、そういえば、この前桜矢さんが「週休二日っていいな」とか言ってた。週給っていうのは、きつと良い物なんだ。

「週給です」

「おお、週給か。わかったよ。毎週五千か、まあ妥当なところだね。正直、時給とか日給とか言われてたら目茶苦茶困ってたんだけど、由美ちゃんが常識的な人で助かったよ」

日給とか言ってたなら、困ってたんだ。最初は日給って言おうと思ってたんだけど、考え直して良かった。セーフだったな。

その後、最初の給料として、五千円をもらった。これで好きな物を買ってもいいらしい。うれしいけど、こんなによくしてもらって悪いような気がする。まあ、それを言ったらまた桜矢さんが混乱状態になるだろうから、絶対に言わないけど。

五千円か、どんな物を買えるんだろう？確か、この前テレビでクイズやってるときの賞金が百万円だった。その二百分の一か。

あれ？たかがクイズに答えるだけでももらえるお金の二百分の一だったら、そんなに買えないような……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0313y/>

桜矢茂は逆境に弱い

2011年12月3日14時48分発行